



TITLE:

臺灣紀行(3)

AUTHOR(S):

山本, 一清

CITATION:

山本, 一清. 臺灣紀行(3). 天界 1935, 15(168): 227-231

ISSUE DATE:

1935-03-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/166995>

RIGHT:

★ 臺灣紀行 ★

(3)

山 本 一 清

十二月23日(日曜) 今日から3日間、帝國大學で日本學術協會の第十回總會が開かれるので、朝食後かけつけたが、既に大講堂では開會式の最中で、中川總督の祝辭の時であつた。其の他、各方面、各代表者の演説や祝辭あり、又、第一回の協會賞の授與式があつて、午食のため一旦休憩したので、自分は白鳥教授等に案内されて新築落成の氣象學教室を參觀、晝餐を饗された。それから荒勝教授に物理學實驗室を見せて貰つた後、再び大講堂に引き返し、中村清二博士の「色の感覺」、大幸博士の「蔗糖の轉化」、矢部博士の「臺灣の地質」等の特別講演をきいた。専門外の此うした話は大に得る所があるやうに思はれる。

7時半、特別講演會が終るや否や、全會員はかねて用意のバスに分乗して鐵道ホテルに行き、總督主催の歡迎晚餐會に臨んだ。自分は第二會場のメイン・テーブルに坐らされたが、デザート・コースに入る頃、約束により、席を立つて、明石町の組合教會に行き、19時半から21時頃まで、「天體と人生」について講話した。

十二月24日(月曜) 急にプログラムを變更して、今日臺北から再び南下することにきめたので、今日は午前中に船會社と船室の交渉をするやら、汽車の寢臺を買ふやら、買物いろいろ、又、折柄、臺灣日々新聞社で開催中の臺灣文化展覽會を見るなどで、忙がしく立ちまわり、11時頃、漸く大學にかけつけ、物理學の論文をきいた。

13時から又物理學(主として氣象天文關係)の分科會に出席し、暫く座長を勤めたが、途中で交代し、川崎氏の

「緯度變化と日射量」

を代讀し、次いで自分の

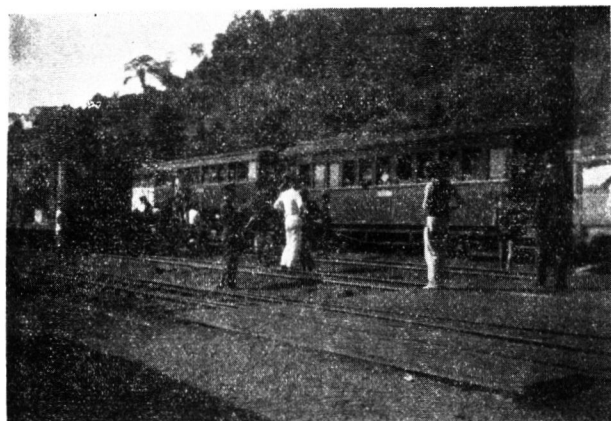
「冥王星の起原について」

を読んだ。

會の終つた後、一旦、宿へ歸り、改めて鐵道ホテルに行き、荒勝教授の招きを受け、仁科、淺居兩氏と晚餐を共にした。

それから、宿の荷物を引きまとめ、22時30分發の急行列車で嘉義に向ふ。

十二月25日(火曜) 朝5時33分に嘉義驛着。かなり長く待合室で時間待ちをした後、8時5分發の登山列車に乗つて阿里山に登る。珍らしい狹軌鐵道で全長



(奮起湖の驛にて)

70軒、トンネルや橋梁は言ふまでもなく夥しいし、「獨立山」の所謂スパイラルや、沿道の遠近に見える蕃社の景色や風俗なども面白

い。陸地測量部の地圖と點々相比べつゝ行く。恰も昨夏カナダ・ロキ1山中を旅行したときのやうに、忙しいが愉快である。正午過ぎ、奮起湖の驛で辨當を開く。それから嶺一つ越えたあたりから、左窓に塔山が見え、又、目的の阿里山も陰顯する。有名な「二万平」や、「神木」驛、幾つかのスピチ・バクを経た後、14時35分に無事阿里山着。あとで聞けば此の鐵道は軌道破損のため昨日まで一部を徒歩連絡してゐたが、今日から始めて全線開通したのだといふ。

着後、阿里山ホテルに入り、ゆつくり休養、内外の風景や地勢を眺め、日が暮れてからはヘルクレスの新星を始め、多くの觀測研究をした。新星はもはや極大を過ぎたらしく、今夜の光輝は龍のγよりも5段低くて、ほど2.7ぐらゐ。又、ミラ星は愈々増光して、2.7と見積つた。黃道光は西空より天頂「羊座」にまで直立してゐる。最も驚いたことは「双子」から「セフェ」まで延びて北天を飾つてゐる銀河の壯觀である。殊に「白鳥」あたりの銀河の濃淡相ひ交錯

する有様は實に眼がさめるやうで、例の「アメリカ星霧」なども眼に見えさうな気がするほど鮮やかである!! 之れ全く、この高山に於ける 空氣の良い結果であると、しばらく感嘆した。

此の日はクリスマスの當日なので、山上から京都の宅へ祝賀の電報を打つ。

十二月26日(水曜) 早くも5時に起き、登嶺の準備をする。會々營林所長の來訪を受け宿のボーイと三人づれ、案内されて、暗い道を、まづ祝山に登る。東天にはヘルクレスの 新星が見え、又、南天には低く「十字架」の星座がチラついてゐる。6時20分に山嶺へ到着したが、日は未だ上らない。しかし、空は可なり明るく、新高の諸連峯は言ふまでもなく、南は關山から、北は次高山や大雪山、又、東北にはマボラスの高峰も見える。實に雄大な景觀であつた。6時55分、太陽は新高の南山から上り、美しく四隣や足元を照らす。愉快極らない。

7時20分、祝山を立ち、峰傳ひに万歳山の高山觀測所を訪ひ、恰も高層觀測用の氣球の上るのを見、又、内部の設備を參觀した。觀測所の屋上から見る阿里山の全景は案外にも誠に見事なものであつた。

9時10分、宿へ歸り、急ぎ、朝食及び荷物をまとめ、9時40分發の列車に乗る。道は昨日のまい、刻一刻に遠ざかる塔山の寫眞を幾枚か撮りつづけ、奮起湖で午餐。それから、又、車は進む。



(日出前の新高山)

15時15分、嘉義驛着。顔を洗ひ、新聞を見、一通り世間並みの人となつて、16時46分發の下り列車に乗り、18時15分に豫定の如く臺南着。師範校の職員や水野女史に迎えられ、電飾の美しい街路に沿ふ、レストランで食事を取り、19時半より思ひ出の師範學校に於いて、約一時間半にわたり、全校の職員生徒や、市内の教師有志に天文講演をした。終つて後、暫く田中校長等と雑談、それから、見送られて、21時37分發の機動車に乗り、更に南下。22時47分、

高雄着。驛前の春田館に入る。こゝは6年前、村上君と共に泊つた所である。

十二月27日(木曜) 朝早く食事や身仕度をすませ、8時に海洋観測所を訪れた。此所は6年前に散策した所であるが、建物は全く新装されて、気持ちの良い観測所となつてゐる。但し、海や港からの烟霧が依然として盛んで、空の観望などには適しないと思はれる。——大急ぎで參觀をすませ、舊知の伊地知氏とも話した後、宿の荷物を取り、9時13分發の列車に乗る。

臺中まで、半日の長い汽車の旅を、退屈だと思つてゐたが、圖らずも、臺南から一中の内田氏が乗られたので、いろいろ話しつい、時間を消した。又、東の窓から山々の景色を見つい、殊に關山一帶の峻嶺を眺めた。

14時45分に臺中着。松本氏に迎えられ、内田氏と共に一先づ松本氏の宅に入り、少憩後、16時頃、三人打ち連れて二中へ行き、内田氏に望遠鏡を見せ、又、板垣校長に別れの挨拶をなし、それから内田氏は又、臺南へ歸られ、自分は松本氏と共に、招かれて中州クラブ會員等と一レストランに於いて臺灣料理の饗應をうけ、ゆつくりと歡談。

21時半、松本氏と同道して、更に、約束により津野田誠吾博士を訪ひ、同邸内に据え付けられた五藤作の15糎玉の屈折赤道儀(自動装置無し)を見、テストのためカストア星等を見たが、直ぐ雨模様となつて來たので、中止し、23時過ぎ松本氏方に歸つた。

十二月28日(金曜) 朝6時50分、松本津野田兩氏に見送られて、いよいよ臺中發。11時40分に豫定の如く臺北に着いた。プラットフォームに速水氏が出迎えられ、早速、鐵道ホテルに案内され、御別れの午餐を饗せられ、それから旅館朝陽號で永々の荷物をまとめ、14時24分臺北發の汽車で基隆に至り、近海郵船「朝日丸」に入つた。

船は16時出帆、小松野滿雨宮諸氏等と同船で、船客は比較的少く、すべて誠に好都合であつた。しかし、船が港外に出づる頃より、モンスーンが多少の波浪をあげ、船がゆれて、幾らか皆參つた模様。

十二月29日(土曜) 可なりうねりのある海を船は北航。正午の位置は東經124°32′、北緯28°10′。自分は室内で旅行中の書類整理などす。空は夜に入つて一部晴れ、ヘルクレスの新星や、ベテルギウス星を見る。

十二月30日(日曜) 朝食の頃から早くも女島が見え、それから終日多くの島々が見えたし、又、浪も幾らか納まり、船の揺れも止んだので、皆々喜ぶ。しかし空は曇りで、午後からは雨模様である。夕方、左舷に多くの海豚を見る。

正午の船の位置は東經 $128^{\circ}11'$ 北緯 $32^{\circ}01'$ 。

十二月31日(月曜) 朝早く、未明、船は門司の沖に停船。検査官の乗り込むと共に又徐々と港内に入つた。ところが、何時の間にか、天氣險惡で、十五六米の南西風が吹きつゝ、波が亂れて、船は投錨するにも、短艇をよせつけるにも非常に困難した。自分は7時に朝食を取り、荷物をまとめ、下船を待たせられたけれど、風雨のため、ハシケに乗り移つたのが9時過ぎで、下關驛へ着いた時には既に上りの急行列車が出て了つた後であつた。止むなく山陽ホテルで小憩。正午過ぎ、12時50分發の列車に乗つた。窓外は依然として風雨。

こんな事状のため、神戸の菫部氏方の觀測所の開所式にも間に合はず、只、22時20分に神戸驛構内で菫部氏夫妻や近松氏に挨拶し、京都へは23時40分に着いた。宅へ歸つたのは1935年元旦の日附けを迎えるより僅々3分前であつた。(終)

今1935年度の火星カレンダー

火星が近づいて來つゝある。今度の火星出現曆は下の通り：

1935年一月 1日	第一 矩象	光度+1.0	視直徑 7''
二月28日	第一 停留	" -0.3	" 11.7
四月 7日	對 衝	" -1.2	" 15.0
" 12日	地球へ最近	" -1.2	" 15.07
五月19日	第二 停留	" -0.5	" 12.7
七月17日	第二 矩象	" +0.45	" 8.5

尚ほ此の觀測好期中、火星は乙女座のスピカ星からガ星あたりの天を往來し、其の赤い光輝は、スピカ星の青白色と並んで、著しいコントラストを示す。春から初夏へかけての天空の、好い眺めであらう。